

以上、「宇治拾遺」、「古本説話集」、「今昔」、「雑談集」、昔話の「わらしべ長者」について考察しおわった。本論を要約すると、次のようになる。

① 四書の説話集のなかで、本文が密接なのは「宇治拾遺」と「古本説話」である。そしてもっとも古い形を伝えているのは「古本説話集」であろう。

② 昔話の原話は、小動物の援助、婚姻による長者への成功、この二条件が必要不可欠なものであったと考えられる。

③ 説話集諸本は観音靈驗譚であり、昔話は成年式譚と考えられる。これは民間に流布していた成年式譚の「わらしべ長者」を素材に、観音靈驗譚に改作した話を説話集の編者が記録したと考えられる。

## 謙讓の補助動詞に関する一考察

——平安鎌倉期の和文資料による——

永江和子

これまでみてきたように、「宇治大納言物語」が存在すれば、「宇治拾遺」、「古本説話集」、「今昔」などの成立とそれぞれの相互関係が明らかになるし、口承か否かも判明するのではないだろうか。平安末期から鎌倉時代にかけての説話文学において、宇治大納言隆国と彼の作である「宇治大納言物語」は大きな意義をもっていると見えよう。

注1 「民俗学」 折口信夫全集 十五卷

注2 「昔話採集者の為に」 定本 柳田国男全集 六卷

注3 「昔話採集者の為に」

注4 日本民俗学辞典

注5 「昔話と文学」

### 目次

#### 序

- 一、 研究の動機と目的
- 二、 取り扱う語 四作品について
- 三、 使用状況を見るにあたって

### 四、 考察方法

#### 本論

第一章 各々の語の時代的変遷

第二章 各作品の謙讓の補助動詞

I 落窪物語

Ⅱ 浜松中納言物語

Ⅲ 大鏡

Ⅳ とはすがたり

結び

序

一、研究の動機と目的

平安期の作品には「きこゆ」「たてまつる」が、謙讓の補助動詞として各々勢力を持って使われ、鎌倉期にはまた違った勢力を形成していることは、国語史上興味ある事実であるが、この事実は未だ各作品についての調査が報告なされていない。そこで本稿ではその調査の分野として、平安・鎌倉期の作品四つにおける「きこゆ」「たてまつる」「まゐらす」等の補助動詞の性格を、その頻度数・待遇関係・上接語の三つの方面から考察しようとするものである。

二、取り扱う語 四作品について

取扱う語は、「きこゆ」系の「きこゆ」「きこえさす」と「たてまつる」そして後「きこゆ」に変わり伸長してくる「まゐらす」の四語とする。但し「きこえさせ給ふ」は、考察の対象から省いた。

作品については、宮地幸一、宮腰賢の両氏が、平安末期から鎌倉期にかけての女流日記八作品について、吉田洋子氏が平安物語について考察なさっているので、これ以外から用例の多く見られそうな作品を選んだ。その作品とテキ

ストは次のとおりである。

「落窪物語」

日本古典文学全集

「濱松中納言物語」

日本古典文学大系

「大鏡」

日本古典全書

「とはすがたり」

日本古典全書

三、使用状況を見るにあたって

使用状況を見るにあたって、まず文章を、地文・会話文の二つに分けた。この区分については、テキストに従った。上接語は、動作表現語と感覚動詞に、森野宗明氏の定義に基づき私なりに区別した。またその各使用度数は述べ語数による。

各語における地文・会話文の傾向は、各作品ごとの「きこゆ・きこえさす・きこえさせ給ふ・たてまつる・まゐらす」での地文・会話文ごとの割合を。また各語の動作表現語・感覚語への下接の傾向については「きこゆ・きこえさす・たてまつる・まゐらす」四語の動作表現語・感覚語ごとの合計の比を一応の目安として、これらと比べることを出す。

四、考察方法

「きこゆ」「きこえさす」「たてまつる」「まゐらす」の四語をそれぞれの作品毎に比較することで、その共存理由をみ、各語の性格を考察する。

本論

第一章 各々の語の時代的変遷

表一

大 鏡			浜松中納言物語				落窪物語				作品			
給ふ	きこえさせ	きこえさせ	まゐらす	たてまつる	給ふ	きこえさせ	きこえさせ	まゐらす	たてまつる	給ふ	きこえさせ	きこえさせ	語	地
0	0	0	0	229	4	14	102	0	56	0	0	11	語数	パーセント
				72	67	47	73		33					文
15	4	15	0	87	2	16	37	2	112	0	5	41	語数	パーセント
100	100	100		28	33	53	27	100	67		100	79		文
15	4	15	0	316	6	30	139	2	168	0	5	52	語数	合
5	1	5		65	1	6	28	1	74		2	23		計
すべて会話文			地 文 合 計 349 (71%)				地 文 合 計 67 (30%)				各語全体の 会話文の比			
			会 話 文 合 計 142 (29%)				会 話 文 合 計 160 (70%)							
			7 : 3				3 : 7							
動作表現語 297 (96%)			動作表現語 419 (86%)				動作表現語 181 (80%)				各語全体の 動作表現 語・感覚語の 各合計			
感 覚 語 13 (4%)			感 覚 語 66 (14%)				感 覚 語 46 (20%)							

はじめに、補助動詞「きこゆ」「きこえさせ」「たてまつる」「まゐらす」がどのように先の四作品に現われているかを概感する意味から用例数を表示する。(表一)

この表から、「落窪」「浜松」「大鏡」では「きこゆ」系が「まゐらす」の使用を上回っている。また「たてまつ

る」は三作品とも六十パーセント以上と多くの使用例が認められるが、「とはず」では、「まゐらす」が六十五パーセントと、「たてまつる」以上に使用され、「きこゆ」系の分野にまで、勢力を伸ばしていることが伺われる。

この点から「大鏡」を境として「落窪」「浜松」と「と

作品		大鏡		たり			が		は		と		語	地	文	會	話	文	合	計	各語全体の 地文・會話文の比	各語全体の動作表現 語・感覺語の各合計							
ま	あ	ま	あ	ま	あ	ま	あ	ま	あ	ま	あ	語数											パーセント	語数	パーセント	語数	パーセント	語数	パーセント
98	51	0	0	1	0	0	0	7	284	116	69	0	0	1	7	284	62	37	0	0	1	7	284	150 (81%)	36 (19%)	4	1	297 (96%)	13 (4%)
84	74			100				100	100																				

はず」とでは、「きこゆ」系と「たてまつる」「まゐらす」の使用数に変化が認められる。これらを踏まえて、次章で作品別に考察を加えた。尚、「きこゆ」「きこえさす」の敬意の程度については、紙面関係上省略した。

## 第二章 各作品の謙譲の補助動詞

### I 落窪物語

#### 一、使用法

表一より、「きこえさす」「まゐらす」は用例は少ないがすべて会話文にみられ、「きこゆ」は、やや多く会話文に、また「たてまつる」は、反対にいくらか地文に多く使われている。

#### 二、待遇関係

「きこえさす」と「まゐらす」は、次の①②と③の比較

でみてる。

- ① 「こと子どもより……述べ聞えさすべき言も侍らず。……」（P三〇一・L四）
  - ② 四の君の御返り、「……たづね聞えさすべきかたなくなむ……」（P三一〇・L十一）
  - ③ おとどの御返り、「……返し参らせけむと思ひたまふれど……」（P三一〇・L八）
- ①と③は、同じ頃の場合で、話手の忠頼と受手の道頼の間もさほどの違いはないと思うが、①は会話文で、③は消息文に使われている。また、②と③では、話手が、②は消息の四の君、③は忠頼、受手は、②が女君、③が道頼と、それぞれ親子、夫婦と同階層であり、両者とも消息文ではあるが、②は女性間、③は男性間で交わされたことで使い分けられている。これらから「まゐらす」が「きこえさす」

表一 必要待遇一覧表

とほざ がたり		大 鏡					落窪物語				作品
ま ら す	き こ ゆ	た ま つ	ま ら す		き こ ゆ	た ま つ	ま ら す	き こ え さ す		語	
(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
地 文	地 文	会 話 文	会 話 文	会 話 文	会 話 文	会 話 文	会 話 文	消 息 文	消 息 文	会 話 文	
移 し	お ど ろ し	お ろ し	見	出 し	見	見 知 り	返 し	返 し	た ず ね	述 べ	上 接 語
作 者	作 者	世 継	世 継	世 継	世 継	世 継	忠 頼	忠 頼	忠 頼 の 四 君	忠 頼	話 手
読 者	読 者	人 々	人 々	人 々	人 々	人 々	人	道 頼	女 君	道 頼	聞 手
後 深 草 院	後 深 草 院	道 兼	目 に 見 え	道 兼	人	人	忠 頼	忠 頼	忠 頼 の 四 君	忠 頼	為 手
後 深 草 院	後 深 草 院	花 山 院	花 山 院	花 山 院	三 條 院	義 懐	道 頼	道 頼	女 君	道 頼	受 手

表 I - 1

話手	作者		道頼		忠頼の 北の方		阿 漕	
	き こ ゆ	た て ま つ る	き こ ゆ	た て ま つ る	き こ ゆ	た て ま つ る	き こ ゆ	た て ま つ る
帝		1						
后	1	1						
一 位			1	1				
二 位		7						
三 位	5	32	5	17	2	10	3	12
五 位	5	14	6	6	1			5
六 位 以下							3	
女 房		1						2

④と③の待遇関係は、聞手以外、両者各々同一人物であるが、聞手が、④は人、③は受手と同じく道頼であることの違いで使い分けられている。つまり、話し相手に対する敬意か第三者に対する敬意の違いによると思われる。このことから、「まゐらす」が「たてまつる」より謙讓意識が強かったと思う。

次に「きこゆ」と「たてまつる」については、条件を同一とするために、話手別に受手を、その階層で分類した表 I - 1 により、「たてまつる」の方が広く使われている以外は大きな違いはない。これは、「きこゆ」が、待遇関係

より、改まった場合に使われていると思う。「まゐらす」と「きこゆ」は「まゐらす」のほうが敬意が高いことは、先のことからも明らかである。「たてまつる」と「まゐらす」の関係は④と③を比べることで考察した。

④ 贈物見たまひて、「……返したてまつらむ」と (P 三〇八・L 十一)



Ⅲ 大鏡

この作品は、ほとんどが世継の語り形式になっているため、表一のように四語すべてが会話文にだけ現われている。二、待遇関係

「きこえさす」と「まゐらす」について、実際に用例、⑤と⑥の比較でみてみる。

⑤ 見知りきこえさすする人もありければこそは (P一八五・L十)

⑥ いとあはれにかなしく、人々見まゐらせけるとぞうけたまはりし。(P八六・L十三)

は、⑤が義懐(三位)、⑥が三條院と、受手の違いから使い分けられている。また話手が世継の時の受手を、その身分で分けた表Ⅲ-1からも、「まゐらす」が敬意が高かったと思われる。

Ⅲ-1

	まゐらす	
きこえさす		
帝		4
后		1
皇族	1	
一位		1
二位	1	1
三位	1	

Ⅲ-2

	たてまつる		まゐらす
神体	17		
帝	49	4	
東宮	2		
后	24	1	
皇族	22		
一位	44	1	
二位	36	1	
三位	9		
四位	3		
五位	13		
六位以下	3		
その他	5		

また「たてまつる」と「まゐらす」については、受手を分類した表Ⅲ-2(話手世継)や具体的に⑨と⑦⑧の比較で考えてみる。

⑦ さて土御門より、東さまにゐて出だしまゐらせたまふに (P八二・L十五)

⑧ 目には見えぬものの 戸をおしあけて 御後をや見まゐらせけむ (P八三・L五)

⑨ あるべき事にてあるに 粟田殿 花山院すかしおろし奉り (P二四九・L十)

⑦⑨は、共に道兼が花山院を退位させる所だが、⑦は花山院伝、⑨は道兼伝の違いにより⑧⑨については、為手受手の関係が、⑨より⑧の身分差が大きいことで使い分けられている。これらから「たてまつる」は広範囲に使われているが、「まゐらす」では、話手が受手に対して好意的な場合に使われていることから、謙譲意識も「たてまつる」より強い。このように「まゐらす」が、「落窪」ではよそ

表Ⅲ-3

語干	世継		待	
	きこゆ	たてまつる	きこゆ	たてまつる
神		17		
帝		49		8
東宮		2		
后		24		6
皇族	1	22		1
一位		44	2	3
二位	2	36		
三位	4	9	1	1
四位		3		
五位	1	13		
六位以下		3		
その他	1	5		1

よそしい時に使われていたのを考えあわせると、「きこゆ」の性格に少し近づいてきていると思われる。

次に「きこゆ」と「たてまつる」の待遇関係上の違いをみるについて、同一の話しごととに、受手を位別に分けた表Ⅲ-3を参照すると、「きこゆ」より「たてまつる」の方が、上位者、下位者と広範囲の人々を対象として用いられていることがわかる。

三、上接語

四語が、それぞれ動作表現語、感覚語に下接する割合は、上表Ⅲ-4のようになる。

まとめ

「大鏡」での四語の特性をまとめておく。

Ⅲ - 4

		全体	きこゆ	きこえさす	たてまつる	まゐらす
動作表現語	語数	297	12	4	274	7
	パーセント	96	80	100	95	100
感覚語	語数	13	3	0	10	0
	パーセント	4	20		5	

語	敬意の及ぶ範囲	会話文・地文の傾向	上接語
きこゆ	┆	会話文のみ	感覚語に多く付く
きこえさす	┆	会話文のみ	動作表現語のみに付く
たてまつる	┆	会話文のみ	感覚語に多く付く
まゐらす	┆	会話文のみ	動作表現語のみに付く

IV とはずがたり

一、使用法

表一より、「きこゆ」は地文に一例だけ、「たてまつる」は会話文に多く、「まゐらす」は、いくらか地文に多い。

二、待遇関係

「きこゆ」と「まゐらす」については、「きこゆ」の用例が一例と少ないため、「まゐらす」の方が広範囲の人々に使われているが、実際に表二の⑩と⑪を比較してみると、  
 ⑩ 明方ちかくなれば、……おどろかしきこえ給ふにぞ、  
 …… (P三三六・L四)



⑪ 角の御所には御影御わたりありしを、正親町殿へ移し  
 参らせられて (P二四四・L十三)

⑩ ⑪とも、為手・受手は帝である。しかし⑩は兄弟の仲で  
 ⑪は親子ではあるが受手が後嵯峨院の御影でかけ離れた存  
 在に対してというように、為手・受手の身分的隔りの違い  
 で使い分けられている。このように「きこゆ」の方が、親  
 密度の深い場合に使われているように思う。

表Ⅳ-1

	たてまつる	まゐらす
神 仏	12	11
朝 廷	1	1
帝	21	51
后	2	5
皇 族	11	26
一 位	1	1
二 位		1
三 位	1	
その他	2	2

「たてまつる」と「まゐらす」を比較するために、地文  
 における受手を身分別に分けた上表Ⅳ-1からは、両語に  
 違いはみられない。

しかし、語手を性別に分けてみると、「たてまつる」は  
 男性十一、女性五十八、「まゐらす」は男性十一、女性百  
 五と、「まゐらす」の方が、全体の使用数が多いにもかか  
 わらず男性の使用数は同じであることから、「たてまつる」  
 は男性語的、「まゐらす」は女性語的といえると思う。こ  
 の点において違いがみられる。

次の「きこゆ」と「たてまつる」について地文に使われ  
 ている両語の受手を、その身分により分類した表Ⅳ-2で  
 は、「きこゆ」が一例ということもあって、「たてまつる」

表Ⅳ-2

	きこゆ	たてまつる
神 仏		12
朝 廷		1
帝	1	21
后		2
皇 族		11
一 位		1
三 位		1
その他		2

表Ⅳ-3

	全体	きこゆ	たてまつる	まゐらす	
動作表現語	語数	157	0	62	95
	パーセント	84		88	82
感覚語	語数	29	1	7	21
	パーセント	16	100	12	18

の方が上層から下層の人々まで広範囲の人々に対して使わ  
 れている。

三、上接語

「とはず」での三語が、動作表現語、感覚語を上接語と  
 する傾向について表にしたのが表Ⅳ-3である。この表よ  
 り、「きこゆ」は感覚語のみ、「たてまつる」は動作表現  
 語、「まゐらす」は感覚語に多くつく。

まとめ

「まゐらす」の伸長が大きいこの作品について、三語を  
 まとめておく。

語	敬意の及ぶ範囲	会話文・地文の傾向	上 接 語	
きこゆ	I	地文のみ	感覚語のみに付く	
たてまつる	I	会話文に多い	動作表現語に多く付く	男性語的
まゐらす	I	地文に多い	感覚語に多く付く	女性語的

これより、「まゐらす」が「きこゆ」の分野に伸長して  
いることがわかる。

結び  
四語別に、作品毎にみられる性格を表にしてみた。

「きこゆ」

作 品	地文・会話文の傾向	上 接 語	
落窪物語	会話文に多い	感覚語に多くつく	
浜松中納言物語	地文に多い	感覚語に多くつく	
大鏡	会話文のみ	感覚語に多くつく	
とはすがたり	地文のみ	感覚語のみにつく	

「きこえさす」

作 品	地文・会話文の傾向	上 接 語	
落窪物語	会話文のみ	片寄りはない	
浜松中納言物語	会話文に多い	感覚語に多くつく	
大鏡	会話文のみ	動作表現語のみにつく	

「たてまつる」

作 品	地文・会話文の傾向	上 接 語
落 窪 物 語	地文に多い	動作表現語に多くつく
浜松中納言物語	地文に多い	動作表現語に多くつく
大 鏡	会話文のみ	感覚語に多くつく
とはすがたり	会話文に多い	動作表現語に多くつく

「まゐらす」

作 品	地文・会話文の傾向	上 接 語
落 窪 物 語	会話文のみ	動作表現語のみにつく
大 鏡	会話文のみ	動作表現語のみにつく
とはすがたり	地文に多い	感覚語に多くつく

これらの表より「きこゆ」は、その使用法では、会話文から地文へと変化しているが、上接語については、四作品とも感覚語に付きやすい傾向がみえ変化はない。

「きこゆ」系の「きこえさす」は、「とはす」でその使用例がみられないように衰退してきている。その性格は、使用法では、三作品とも会話文に使われていて変わりはないが上接語で「大鏡」では動作表現語だけに付いているように、作品毎に変化がみられる。また敬意は、すべての作品で「きこゆ」より強い謙讓の意識を伴っている。この敬

意の点に衰退しつつある「きこゆ」系でも「きこえさす」の方が、謙讓の意識の強い語として使われ始めていた「まゐらす」に、その地位を早く奪われた原因があると思われる。「たてまつる」では、使用法が徐々に会話文に多く使われるようになる。これについて「大鏡」で二百八十四も会話文に使われていることは、この作品から「たてまつる」が会話文のほうに多く使われているということ注目される。上接語に関しては、「大鏡」で感覚語に多くみられるが、これは一パーセント感覚語の割合が多いため、他の

三作品ともほとんど変わりなく動作表現語に下接しやすい。「まゐらす」では、使用法について「きこゆ」が会話文から地文に、「たてまつる」がその逆へと変化していることと、「まゐらす」が「きこゆ」系の分野で勢力を伸ばしてきたため地文に使われやすくなり、上接語は「きこゆ」の衰退により感覚語に多く承接しやすくなっているようである。なお上接語については、資料の数の上からは、感覚語には、「きこゆ」系が、動作表現語には、「たてまつる」が下接しやすく、「まゐらす」は動作表現語、感覚語ともに上接語にしやすい。

「きこゆ」「たてまつる」の特質は、互いに反対の地位を形作っている。このため、両語の特性を合わせ持つていた「まゐらす」も「きこゆ」の衰退に伴って伸びてくることから、後には「たてまつる」とは違った性格を持った語

## 安部公房とフランツ・カフカ

——メタモルフオーゼをめぐる——

原岡弘子 (23回生)

### 目次

序

第一章…カフカの『変身』について

第二章…安部公房の作品と時代認識(省く)

として、その地位を確立している。

四語の調査・考察を試みたが、諸説のように、「落窪」から「とはず」までの四作品においても、およそ三百年の間に、それぞれ変化していることが明らかになった。

#### 参考文献

補助動詞「きこゆ」から「まゐらす」への漸移相

——女流日記作品を中心に—— 宮地 幸一  
宮腰 賢

東京学芸大学紀要二二人文

中世前期の「たてまつる」Vと「まゐらす」V

——平家物語を資料として—— 古田 洋子

親和国文四

古代の敬語Ⅱ 森野 宗明

講座国語史五敬語史 大修館書店

第三章…メタモルフオーゼについて

第四章…カフカと公房

あとがき…公房の可能性……………(省く)

(注)について……………(省く)